おれと安保

第1回 労働運動に目ざめて

捲土重来の闘いめざして

私も必ずその一員に

港務 塚本正男さんの意見

編集部では三池の労仂者として、どう安保闘争を闘うかという組合員の方々の意見を連ざいすることにしました。第一回目は七月四日に停年退転された塚本さんのご意見を紹介します。この文章は塚本さんが港務指導部庁炭分会の送別会で読みあげられたものです。

塚本さんは三池労仂者として闘い抜いた誇りと後輩への教訓をのこして八月四日に東京の息子さんたちの所へ住むために出発されますが、塚本さんはこのほど退転金の一部をさいて、港務指導部に黒板を贈られました。

戦場でみた「死の商人三井」

みなさん、ながい間公私にわたるご指導、ご鞭撻にありがとうございました。私の今日あるはひとえに皆様方の深いご理解と心強いご協力によるものと深く感謝いたします。

かえりみますれば、三十三年前入社試験合格の通知に胸いっぱいの希望をふくらませて通勤をはじめたものであります。その間、日中戦争において北支、中支を転戦しているうちに菊の紋章のない三八式歩兵銃をたくさんみました。これは三井物産を通じて当時の中国の兵隊に売り渡されているものでした。私たちは同胞の作った銃器により殺されていたのです。そののが、いかに死の商人であるかを思い知るに十分な証拠でした。このころから私は一つの懐疑をいだくようになりました。でもそれはばくぜんとした型のないものでした。

しかし、資本家はいつまでも労仂者を甘やかしてはいませんでした。地域分会の結成につづく主婦会の結成には会社の全組織をあげての妨害し排除しようとしたものでした。その上、官憲の力を借りてまでも過去、現在、未来を通じてかがやかしい栄光への道です。だが、そのの道は泥まみれの汚れた道でありましょう。あるいは息が切れそうになるかも知れません。闘いにつかれたと思うときがあるかもしれません。しかし、それはわれわれの側ばかりではありません。敵も同様、第一線で思ぶるときをまたねばなりません。

条件は高まつている

資本家は労仂者の一人ひとりが身体でくみ上げている水を分けあってのんでいるだけです。それが現在の当然な世のしきたりであるにしても、これを改めるべく努力するのです。われわれは地上から天に達するのではなく、天を地上に引きおろすための努力をつづけねばなりません。現実の力の政治には懐疑を抱く者がでてくるのも当然であります。今日われわれのうけている差別と弾圧に対するエネルギーはますます強化され、蓄積されつつあります。

まず学習を

満ちた水は流出のみちをもとめざるをえません。たたえられた水はもっとも抵抗の弱い所を破ってあふれるであろうと会合し、本を読むことの必要さを痛感します。

負けるな、やせ蛙

みなさん、今後は委員を中心とした団結をより一層強化されて、どんな重圧もはね返えし、おそいかかってくる権力との闘いに備えられるであろうことを信じます。

いま、私はみなさん方の戦列から姿を消さねばなりませんが、どこにいようとも、みなさん方の行なわれるであろう捲土重来の闘いには何らかの型でともに闘いたいと思っています。

来るべき七〇年安保の闘いに備えて、あるいはクビ切り撤回に、日長く闘える体力と気力を維持されてますます団結を強化され、一茶の句に「やせ蛙、まけるな一茶ここにあり」というのがありますが、三池労組を離れてからも一貫して三池を主題にした詩作に取り組み、三池闘争の中では「警鐘」「五月二十日」「七月二十三日十九時〇分の発砲について」「三池」、三十三年の大爆発時には「この虐殺」などのすぐれた作品をいちはやく発表しました。

「この二十年」を読んで、時々の情勢に敏感であること、敵に対する告発がするどい武器になっていること、記録が適確であることなどの特徴を見てとれますが、詩を書き、学ぶ者だけでなく、一般の読者にも啓発されるものがあると思います。近く合評会も行なわれますが、闘う三池の仲間たちにぜひ一読をおすすめしたい。

×　×

なお、この詩集はタイプ印刷二〇八頁、頒価二百円です。文学サークル「炭鉱地帯の会」で取り扱っています。

（三川＝杉本一男記）

総評定期大会終わる

70年闘争へ体制確立

十一月、六月にスト

【KNA】総評第二十八回定期大会は七月二十日から五日間、東京・文京公会堂で開かれた。大会には五十九単産五百三十人の代議員など約千人が参加した。

大会は七〇年を前にして、「合理化」反対闘争、国民的諸要求の闘い、安保廃棄・沖縄全面返還の三つの主要な課題をかかげて、ことしと一月の佐藤訪米直前にストライキを含む実力行使を行なうことを決定した。

大会論議は、三日目と四日目午前中を分科会討論にしたこともあって、「合理化」反対闘争、民主勢力の共闘問題、さらに注目の反戦青年委員会問題などが深く討論された。

「合理化」「闘争を重視」

一九六〇年、総資本対総労仂のまが、戦力を蓄積し、団結を固めて、資本のあくなき野望をうちやぶるときをまたねばなりません。

三日の闘いへと発展し、八日の闘いと私たちは徐々にではあるが組合を中心とした労仂者の団結により、あるいは不満ながら涙をのむ思いの闘いをもみなさんとともに闘うことができました。

一九六〇年、総資本対総労仂の闘いといわれる三池闘争において、みなさんと同様、第一線で思ぶるときをまたねばなりません。だがこの呻吟は悩みとか疲れとかの呻吟ではありません。夜明けの陣痛にほかなりません。この陣痛がやんだとき、われわれの前には大きな広い、明るい世界が開けているに違いありません。

現在は日暮れて道遠い感があります、戦力を蓄積し、団結を固めて、資本のあくなき野望をうちやぶるときをまたねばなりません。

どう国民に訴え、世論の高まりのなかで、かりに十一月ストができなくても前向きに闘うことが重要だ」（国労・酒井）、「大事なことは国民のなかに反安保の行動が広がっていくようにすることだ」（合化・大田）などの意見が出た。これに対して岩井事務局長は「私が陣頭指揮で反安保を訴える大量宣伝、学習を推進する。そのための動員も県評のみなさんと十分相談したい」と答えた。十一月、七〇年六月のストについては国労、日教組、自治労などが力強く闘う決意を表明して会場の拍手をあびた。

「合理化」反対闘争は七〇年闘争の主要な柱としてかってなく重視された。「合理化案には撤回という態度で臨むべきで、対案を出すことは譲歩に通ずる」（動労・鴨田）など基本的態度にかかわる問題に論議が集中、「私鉄の合理化は単に交通政策だけでなく、過疎、過密の都市問題にかかわる問題で、闘うには強力な地域共闘が必要だ」（私鉄・三橋）などの意見があった。

「全国反戦」は凍結

反戦青年委員会の取り扱いをめぐっては動労、自治労など五単産が原案の「全国反戦は凍結」に対し「育成強化」の修正案を提出した。「反戦はだれと闘っているのか、総評でも「部の派閥でもなく、国家権力である」（自治労・前田）「七〇年安保を闘い抜くにはネルギーを借りざるを得ない」（動労・中江）などの反戦強化論。これに対して、岩井事務局長は最後の総括答弁で「全国反戦は凍結、各県反戦は三派全学連の影響を排除する」との見解を出し、修正案提出組合も納得した。

共闘問題では岩井事務局長は、①安保廃棄・沖縄返還を旗印とする民主勢力の共闘を積極的に推進する。②そのため両実行委の共闘では不十分で民主勢力を一つとした実行委員会をつくることも考える。③社会党は国民に対して積極的に進める決意を述べた。

「出産解雇」許せない

女性差別と闘う三井造船の末波さん

【KNA＝大阪】「子どもが生まれたから会社をやめなければならないなんて、こんなばかげた制度はない」と、大会社三井造船を相手に、出産解雇に反対して闘っている婦人がいる。三井造船大阪事務所に勤務の末波和美さん（二十五才）がその人。

末波さんは三十八年に入社、四十三年二月に結婚し、十二月に出産したが、「出産後も勤めたい」という末波さんに対して、「女の人は仕事に熟練する必要はない。腰かけでけっこう」「君は必要ない」ときめつけ、産休のあけた二月はじめに「あすから出社したら不法侵入で訴える」と、一方的に解雇してきた。

もともと三井造船は女性差別のひどい職場で、末波さんが入社した当時は、女性には新入社員の教育もなく、雑用とお茶くみが仕事」といわれていた。

会社が末波さんの解雇の根拠にしているのが労仂協約だが、協約は、退転金を「基本退転金」と「特別退転金」の二本建てにして、二十五歳をこえた女子の退転の場合は、一年ごとに「特別退転金」の率が低下して、三十歳ではまったくなくなってしまうという仕組み。早くやめなければ損というわけだ。

末波さんの闘いは大きな反響をよび、職場のなかでも、「末波さんの闘いは、私自身の問題だ」と支援する人もふえ、「末波さんを守る会」の会員は、職場と地域に大きく広がっている。

（激励先）高槻市八幡町六―二一　末波和美さん

私の書棚

上野信幸詩集 ◇◇◇◇

"この二十年"について

このほど、上野信幸氏の詩集「この二十年」が私費出版されました。

上野氏は現在、全日自労大牟田分会の書記長として活動されていますが、三池労組を離れてからも一貫して三池を主題にした詩作に取り組み、三池闘争の中では「警鐘」「五月二十日」「七月二十三日十九時〇分の発砲について」「三池」、三十三年の大爆発時には「この虐殺」などのすぐれた作品をいちはやく発表しました。

「この二十年」を読んで、時々の情勢に敏感であること、敵に対する告発がするどい武器になっていること、記録が適確であることなどの特徴を見てとれますが、詩を書き、学ぶ者だけでなく、一般の読者にも啓発されるものがあると思います。近く合評会も行なわれますが、闘う三池の仲間たちにぜひ一読をおすすめしたい。

×　×

なお、この詩集はタイプ印刷二〇八頁、頒価二百円です。文学サークル「炭鉱地帯の会」で取り扱っています。

（三川＝杉本一男記）